



令和元年度
地域福祉拠点設立推進プロジェクト

事例集



広島県老人福祉施設連盟

目次

Contents

I. はじめに	2
II. 地域共生社会の実現に向けた取り組み 実践事例	
1. 令和元年度 新たな参加施設の取り組み	
[三 次] 特別養護老人ホームすいれん	3
[呉・海田] 特別養護老人ホーム誠心園	8
[廿日市・可部] 特別養護老人ホームゆうあいホーム	14
2. 平成 30 年度からの継続参加施設の取り組み	
[福 山] ケアハウスサンフェニックス	20
[尾 道] 特別養護老人ホームせせらぎ園	24
[東広島] 特別養護老人ホーム桜が丘保養園	28
III. ふりかえり	32
IV. 関係資料	
● 令和元年度地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議委員	34

I. はじめに

平成30年度、広島県からの支援を受けて、本連盟として施設を拠点とした「我が事・丸ごと」の地域づくりを推進し、包括的な支援体制の整備を柱に「地域共生社会」の実現を目指した地域公益活動を推進するため「地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議」において事例集を作成しました。

今年度は本連盟独自事業として、会員施設の理解と協力のもと、本プロジェクト会議を継続し、地域における少子高齢化、人口減少などを踏まえた福祉ニーズに対応するサービスを充実させると共に、地域の困りごとを住民や会員施設・事業所が「我が事」として捉え、様々な相談や複合的課題を「丸ごと」受け止め、多職種が地域住民と協働して支援していく取り組みを進めて参りました。

今後も社会福祉法人に課せられた使命として地域共生社会の実現に向けた社会的要請に応え、また、老人福祉施設が地域住民から頼りにされ選ばれる施設になるために地域福祉拠点づくりは更に必要になるものと考えます。

令和という新たな年に、事例集第2弾を作成しましたので、大いに活用して各地域における福祉拠点づくりの取り組みを進めていただき、「地域共生社会」の実現に向けた一助になれば幸いと存じます。

令和2(2020)年3月

広島県老人福祉施設連盟

会 長 池 田 円

認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり

【三次ブロック】 特別養護老人ホーム すいれん

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば「共生社会」を念頭においた課題)

- ・周りの地域住民は、事業所運営に関して協力的で、ボランティアの提供など様々な運営協力をしていただいている。その一方で、事業所として地域で果たす役割は、介護保険サービスの提供に留まっている。全般的に地域との関りが限定的である。
- ・三次市三次町は、住民の地域連帯の意識は強いものの、認知症の方が住みやすい町としては、課題がある。在宅サービスを提供するなかで、利用者の認知症状を起因とする苦情を受けることもある。誰もが住みやすい町づくりを目指す必要がある。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような「共生社会」を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域住民が共生を意識して、認知症高齢者が困っている場面に遭遇した時、「どうされましたか」と声をかけることができ、「〇〇へ連絡しますね」と適切に関係機関に繋げることのできる地域

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の”見たい未来“を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域住民の認知症に対する理解が進み、偏見が軽減される。
2	医療福祉関係者が認知症に対する社会資源を有効活用できる。
3	関係機関の横のつながりが強く、連携がとれる。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	民生委員など地域の有識者との関係づくり
2	医療、福祉関係者と連携を図り、社会資源の共有化、社会資源の再開発を行う。
3	認知症に関連した取り組みを行い、地域住民に対して共生の機運を高める

5. そのための事業内容

(1) 地域との関係性強化

地域行事に関して、参加するだけでなく、当事者として運営に関わる。地域の民生委員、自治会長、小中学校と顔の見える関係づくりを行う。

(2) 関係機関と協議

地域包括支援センター、社会福祉協議会と協議して認知症の方を地域で支えるための方策について協議する。

(3) 地域住民に対して認知症に関するアンケート実施

住民の意識やニーズを把握する。

(2)、(3) を基に、地域で認知症の取り組みを実施する。

- ・認知症カフェの実施
- ・認知症研修会の実施
- ・住民を交えた取り組み主体の発足

6. プロジェクト推進体制

三次市西部圏域（三次町、十日市）の介護サービス事業所3施設の管理者と本プロジェクト担当施設の職員4名で構成する。

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
6月 ～ 10月	地域の有識者へヒアリングを実施して、地域のニーズの把握に努める。	事業所内職員が地域住民、関係機関に聞き取り	地域ニーズの把握 事業所と地域住民の関係構築	民生委員協議会、地域包括支援センター、社会福祉協議会、地域サロン、ボランティアグループの担当者にヒアリングを行う。	地域の各団体と接点をもつことで、顔のみえる関係の一步となった。各団体の機能、社会資源について、相互の連携、情報共有が必ずしも十分ではないことを把握した。
8月 ～ 11月	地域住民対象とした、認知症のアンケート作成 アンケートの実施、アンケート結果の分析、取り組みを実施	三次市三次町の住民へアンケート実施	住民の認知症に対する意識の確認、ニーズの把握	9月～11月初旬にかけてアンケート調査を実施 自事業所の介護予防事業の参加者、地域のサロン、民生委員会議、ボランティアグループ等からアンケート協力を得る。N=181（2019年12月31日時点）	アンケート結果についてチーム内で共有、分析 ・認知症の方への関わり方を教えてほしいとの声が多い ・「認知症の方が地域で暮らすためには地域の協力が必要」約90%といった結果がある一方で、認知症の人の言動に困らされている、等の回答も散見された。 認知症の方が地域で過ごしやすくなるためには、認知症の正しい理解の普及を図りつつ、地域単位で検討する場が必要だと考えるに至った。 地域包括支援センターと共同し



9

<p>10月 現在</p>	<p>認知症カフェの開設 事業所内で10月18日第1回目を開催 毎月第3土曜日に開催することとする。</p> 	<p>事業所内職員が地域の方へ</p>  <p>出張 すいれんカフェ</p> <p>出張費無料、お茶代100円</p>	<p>地域での認知症の正しい理解の普及 アンケートの中で、認知症の特徴は様々な場所で啓蒙されているが、ケア方法について学ぶ場面が少ないとの声が多くあった。認知症の方へのケア方法に主眼を置いた内容とする。</p>	<p>開催場所について参加者に施設利用者と接して欲しいと考え、事業所内のフロアで開催することとした。 参加人数としては、第1回17名、第2回22名、第3回16名、第4回22名と参加があった。</p>	<p>て研修会をすることとなる。 参加者からは、「楽しく学ぶことができてよかった。」との声をいただく。 一方で、事業所のスペースが限られており、20名を超えると対応が難しく、新たな広報活動は控えている。 地域のサロンなどに、訪問型の認知症カフェとして活動することを各方面へ提案した。</p>
<p>1月</p>	<p>地域ケア会議の準備会議 認知症についての取り組みを実施するため、地域包括支援センターとともに、会を発足させる。</p>	<p>地区社協会長、児童民生委員長、三次市社会福祉協議会、地域包括支援センター、三次市保健師、事業所職員</p>	<p>誰もが暮らしやすい地域を実現するため、取り組みを実施する主体となる会を発足させる。</p>	<p>2020年2月25日に第一回目の会議を開催する。 関係団体の取り組み状況、課題を確認。次回認知症のアンケート結果の確認と認知症研修会の内容を検討することとなる。</p>	<p>事業所を事務局とした会の発足を予定していたが、地域包括支援センターから将来的に地域ケア会議につながる取り組みをしたいと要望があり、地域包括支援センターを事務局とする会の運営に協力することとなる。</p>
<p>3月</p>	<p>認知症に関する研修会</p>	<p>地域包括支援センター職員、事業所職員</p>	<p>認知症の正しい理解の普及と認知症の方を支える地域づくりの必要性を伝える場を設定</p>	<p>3月8日に実施予定であったが、コロナウィルス対策のため延期となる。</p>	<p>研修会が延期となったことで、研修内容について、民生委員などの多方面の意見を聞いて、研修を実施する方向となった。</p>

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

地域での取組を実施するためには、地域と顔の見える関係となり、関係機関との関係を強化する必要があると感じた。災害対策については、地域の関心の度合いが高い。取組が地域の災害対策になることのみならず、関係者間の関係強化につながると感じた。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	民生委員など地域の有識者との関係づくり	アンケート調査の依頼などを通じて、各団体と接点をもつことで、顔の見える関係を築くことができた。	顔の見える関係を維持し、関係を強化するためには、清掃活動など地域での活動を継続していくことが必要
2	医療、福祉関係者と連携を図り、社会資源の共有化、社会資源の再開発を行う。	社協や地域包括支援センターにヒアリングを実施して、各関係者が実施している施策などを把握した。	各団体が実施している事業についての情報共有が十分ではない。地域包括ケア会議などの場で、洗い出しを実施する。
3	認知症に関連した取り組みを行い、地域住民に対して共生の機運を高める	アンケート調査、認知症カフェにより、微力ながら認知症の理解の普及に寄与した。	訪問型認知症カフェを活用して、多方面の地域に認知症の理解の普及に努める。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2020年度の取り組み	地域包括ケア会議を活かし、定期的に各団体の取り組み状況などを確認し、情報共有を行う。顔の見える関係を維持し、地域での役割を考えていく。
中長期的取り組み	認知症の方が住みやすいまちづくりのため、他の関係機関と協力して、社会資源の維持、開発を図っていく。多年代の世代と交流をもち、共生社会の実現にむけて、活動していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	事業所が地域で活動するためには、土台となる関係性が必要であること。
施設長	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民、関係機関との関係性が地域での取り組みに大きく影響する。 ・顔の見える関係を構築し、関係機関が有している社会資源を把握すること。

災害時、地域と共に活動するために

【呉・海田ブロック】 特別養護老人ホーム 誠心園

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば「共生社会」を念頭においた課題)

- ・ 2018年7月豪雨災害時、江田島市や地域住民、他施設と情報共有が出来ておらず、地域住民への情報提供や避難への支援ができなかった。
- ・ 地域住民との関りが希薄で、災害時の地域ニーズが把握できていない。
- ・ 特養の生活相談員は地域へ出向くことが少なく、「かお見知り」の関係が築けていない。そのため困りごとがあっても特養に相談に行くという発想が生まれません。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような「共生社会」を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域の中でともに支え、ともに生きる。施設を通じて地域をつなぐ。
災害時には地域全体が協力できるよう、お互い「かお見知り」の関係を築く。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域住民と施設職員がかお見知りの関係で、災害の際にはお互いがすぐに協力できる。
2	地域住民の現状を把握し、施設が住民同士の架け橋となる。
3	江田島市と協力し、災害時には情報の共有、その情報を地域へ繋げる。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	居宅介護支援専門員、江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員、特養生活相談員が協力し、地域へ出向く。
2	災害時に実際地域住民に必要な支援を江田島市や社協、民生委員と共有する。
3	地域住民の現状と抱えている問題を把握する。

5. そのための事業内容

- (1) 地域住民のニーズの把握のために、まず足がかりとして当施設の利用者様、その家族情報を当施設居宅、江田島市地域包括支援センターランチから収集し、プロジェクトメンバーで状況に合わせ分類する。
- (2) 自治会が主催するテーブル会議へ参加し地域住民が抱える問題の把握
- (3) 江田島市、他事業所と連携をとり、災害時には協力し支援を行うための会議へ参加する。


6. プロジェクト推進体制

- ・ 施設長、事務長、デイサービス管理者、グループホーム管理者、居宅介護支援専門員、江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員、特養介護支援専門員、特養生活相談員
- 《災害時相互応援ワークショップ参加》
- 《江田島市多職種連携会議・江田島市地域包括支援センターランチ連携会議参加》 《江田島町内テーブル会議参加》
- 《江田島町〇〇地区テーブル会議参加》 《ワールドカフェ江田島参加》
- ・ 江田島市社会福祉協議会、ケアハウス・こよの里 親和園、特別養護老人ホーム江能、まほろばの里 沖美、誠心園等
- ・ 江田島市江田島町〇〇地区地域住民

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
7月 ～ 8月	プロジェクトメンバー選定	<ul style="list-style-type: none"> ・園長・事務長 ・居宅介護支援専門員 ・江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員 ・デイサービス管理者、生活相談員 ・グループホーム管理者 ・特養生活相談員・特養介護支援専門員 	プロジェクトの趣旨を共有する社会福祉法人として何ができるかを検討する	プロジェクトを法人全体で取り組むことと、地域へそれぞれが出向きその後情報の共有を行う(7月10日)	地域で行われている既存の取り組みへ参加する担当者を決定した。
	当法人居宅担当利用者様の災害時に考えられる問題をプロジェクトメンバーで把握、 <ul style="list-style-type: none"> ・対象利用者様を絞り込む ・対象者の身体状況、自宅の把握を行う ・対象地区の選定 	<ul style="list-style-type: none"> ・園長・事務長 ・居宅介護支援専門員 ・江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員 ・デイサービス管理者、生活相談員 ・グループホーム管理者 ・特養生活相談員・特養介護支援専門員 	まず当法人施設利用者様のニーズの把握を行う	利用者様の情報を地区、家族の有無等で分類(7月19日～8月31日) 対象者の自宅を把握するために実際に避難経路の確認	情報を分類することで分かりやすくなり、多数の利用者様から実際に支援を行う対象者を絞り込めた

	<p>江田島市 災害時相互応援ワークへの参加（毎月継続）</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・園長 ・デイサービス生活相談員 ・江田島市社協 ・ケアハウスこよりの里親和園・江能・まほろばの里沖美（それぞれの施設代表） 	<p>施設間で防災、災害時の活動を取り決めておくことで有事の際、素早く行動ができるようにする</p>	<p>会議を重ねマニュアルの作成</p>	<p>事務局のあり方等様々な課題を施設間で検討することで結束が生まれた</p>
<p>9月 ～ 10月</p>	<p>対象地区の主催する会議への参加</p>	<p>〇〇地区自治会福祉部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・婦人部 ・民生委員 ・江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員 ・特養生活相談員 	<p>実際に地域に出向き、特養、自分たちの顔を覚えてもらう</p>	<p>〇〇地区見守りネットワークテーブル会議へ参加し、実際に地域住民の声を聞くことができた</p>	<p>高齢化が進み、高齢者を高齢者が支援している状況。全てに対応ができない</p> 
<p>11月</p>	<p>〇〇地区の防災訓練へ参加</p> 	<p>〇〇地区自治会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・婦人部・民生委員 ・江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員 ・特養生活相談員 	<p>地域住民の防災意識に直接触れる</p>	<p>広島県の防災訓練の一環として 〇〇地区でも防災訓練が実施</p>	<p>〇〇地区も人口の減少と高齢化による人材不足 安否確認や世話人等の確保に不安を抱えている</p>

12月	江良島市 災害時相互応援ワークショップのマニュアルについての会議	園長・事務長 ・居宅介護支援専門員 ・江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員 ・デイサービス管理者、生活相談員 ・グループホーム管理者 ・特養生活相談員 ・特養介護支援専門員	法人全体でマニュアルを周知し有事に行動できるようにする	マニュアル作成までの説明と課題の報告	人材不足、資金調達の問題 自分たちの施設利用者様の生活も守らなければならず実際にどこまで支援できるか模索中
1月	〇〇地区テーブル会議への参加	〇〇地区自治会 ・婦人部 ・民生委員 ・江田島市地域包括支援センターランチ介護支援専門員 ・特養生活相談員	来年度の自治会としての要配慮者への取り組みの確認 ・2018年豪雨災害時の反省をもとに防災時の情報共有を検討する	情報の共有を行う上で問題を上げ、改善方法を検討した 	江田島市としても個人情報はどう集め、有事の際に有効に使用できるか進めているが、自治会としても情報を集めておかなければ素早い対応ができない。施設として協力するなかで、民生委員とも協力できる体制を整える。 来年度は要配慮者の情報の取り扱いについて整理しながら有事の際の混乱を最小限に食い止める。

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

- ・地域住民との交流の仕方 他施設の方が日頃どの様に地域に出向いているのか、どのようなことで悩んでいるのかを聞くことができたので、とても参考になった。
- ・開かれた施設として地域の方がどんどん施設に来られていることを知り、私どもの施設も地域住民とお互いが支援しあえる環境をつくるために行動を起こすきっかけとなった。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	当施設の利用者様の災害時に起こった問題を法人全体で把握する	居宅から情報を集め、実際に起こっていた問題から、自分たちができることを検討できた	限られた人員で当施設の利用者様の生活も守りながら地域で生活する利用者様を支援するために対象者を絞り込んだ
2	災害時に施設間で協力できる体制作り	江田島市にある施設で会議を重ね、災害時には相互が協力できるよう協定を結び災害時マニュアルを作成した	人員不足、資金調達、場所の確保など実際の災害時でないと分からない事も多数あるが、臨機応変に対応できるよう体制を組んだ
3	地域住民に特養の生活相談員の顔を知ってもらおう	江田島町の〇〇地区住民の主催するテーブル会議へ参加し少しずつ顔を覚えていただけた	地域も高齢化が進んでおり、人材不足の問題を抱えている。施設の職員も社会資源と考え災害時はお互いが支援しあえるよう交流を行う

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2020年度の取り組み	2019年度は災害に突起して地域住民の課題把握に努めたが、課題は災害だけでなく様々あるはずなので来年度は他の課題を把握し、社協とも協力して江田島市を支えていく取り組みを行う。
中長期的取り組み	地域での情報交換を継続し高齢者だけでなく、高齢者を取り囲む状況へのアプローチをしていく。特に「引きこもり」の状態で社会（地域）との関係が希薄な方の状況の把握を行う。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	「顔が見える関係」を築くためにまず一歩踏み出すだけで、様々なことが動き始めました。地域住民と交流を持つことで現実的な課題が見えてきました。
施設長	プロジェクトを通して、地域とつながり、他機関多職種とつながり、法人内でつながり、3つのつながりを持つことができました。特に、特養の職員には、地域との関りをもつ機会が少ないため、いいきっかけになったかと思います。 今後は、共生社会の実現に向けて、高齢者だけでなく、障害や児童など様々な地域のニーズに対応できるよう取り組みを継続していければと思います。

地域に不可欠な施設となるためのキックオフ!

〔廿日市・可部ブロック〕 ゆうあいホーム

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば「共生社会」を念頭においた課題)

大竹市・大竹市社会福祉協議会・他福祉機関・民生委員等・地域住民との関係作りを始めたばかりで、信頼関係を構築できているとはいえない。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような「共生社会」を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

<短期的ビジョン>

日常的に地域住民が職員・入居者とあいさつができる関係を構築する。

災害等の非常時に地域住民に頼られる施設となる。

⇒そのために、民生委員を含む地域住民と顔見知りとなり、地域の問題を語り合える居場所を創る。また、その問題解決に向けて、行政・他福祉関係者と相談し合える関係を構築する。

さらに、災害時への備えを盤石なものとするよう、計画作成等の準備を進める。

<長期的ビジョン>

保育園児・小学生・中学生・高校生との交流を深め、施設の知名度・好感度を上げる。

そして、介護を目指す地元学生の採用に重点を置き、「近所のおじいちゃん・おばあちゃんのお世話をする施設」として大竹市になくてはならない施設となる。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像

1	できるだけ多くの福祉関係者や地域住民と顔見知りになる。
2	地域住民が気軽に訪れる施設になる。
3	災害時等に頼られる施設になる。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標

1	可能な限り、施設に来る人を増やし、他組織の行事等に参加する。
2	施設での行事を企画・運営する。
3	災害時の対応計画を具体的に策定する。

5. そのための事業内容

- ・ゆうあいふれあい夏祭りの実施
- ・大竹市ふれあい健康・福祉まつりへの積極的参加
- ・大竹市介護支援専門員連絡協議会の災害対策研修への継続的参加
- ・民生委員・児童委員との交流

6. プロジェクト推進体制

プロジェクトメンバー:施設長・事務長・主任ケアマネ・相談支援員(障がい)【不定期にミーティング実施】

担当:地域交流(学校関係・民生委員・町内会等)⇒施設長・事務長

地域交流(社協)

⇒相談支援員(障がい)・施設長・事務長

防災

⇒主任ケアマネ・施設長・事務長

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
4月	大竹市社協等と打ち合わせ	施設長・事務長 相談支援員	ゆうあい夏祭りの準備	4/19 ミーティング開催 日程・内容の確認	各自の想いや考えを伝達 具体案は次回に持ち越し
5月	大竹高校施設訪問	施設長・事務長 担当職員・高3生	介護施設見学 	5/17 実施	高3生 11名参加 介護施設の説明を実施
	ケアマネ協親睦会参加	施設長・事務長 ケアマネ・他事業所	他事業所等との交流	5/30 実施	近況報告
6月	玖波小学校訪問 	施設長・事務長 ケアマネ・他事業所 法人職員・小3生	地域との交流	6/20 実施	毎年の恒例行事
	保護司会訪問	法人職員・保護司 保護対象者	社会貢献活動	6/25 実施	介護施設の紹介
7月	ケアマネ協研修参加	主任ケアマネ・ケアマネ	災害時の対応の確認 	7/7 実施	災害発生時の行動確認

<p>8月</p>	<p>民生委員・児童委員との交流会</p> <p>大竹高校インターンシップ受け入れ 大竹市社協等との打ち合わせ</p> <p>中学職場体験の受け入れ</p>  <p>ゆうあいふれあい夏祭り</p> 	<p>施設長・事務長 民生委員 法人職員・高2生 施設長・事務長 相談支援員 社協・大竹市 法人職員・中学生</p> <p>法人職員・利用者 社協・大竹市 地域住民</p> <p>法人職員・中学生</p>	<p>法人への理解</p> <p>地域との交流 ゆうあい夏祭りの最終確認</p> <p>地域との交流</p> <p>地域との交流</p>	<p>7/10 実施</p> <p>7/23～25 実施 7/26 実施</p> <p>8/21・22・23・26・27</p> <p>8/29 実施</p> <p>9/24・9/27</p>	<p>出席者の半数が初訪問 法人理解のスタート 毎年の恒例行事 出演者を含めた担当者と協議 準備・当日の流れの確認</p> <p>毎年の恒例行事</p> <p>入居者の満足度高 来年以降は地域住民の 参加拡大に期待</p> <p>体験者の感想等の確認</p>
<p>9月</p>	<p>中学職場体験発表会参加</p> <p>玖波小学校訪問 大竹市災害ボランティア センター運営研修</p>	<p>法人職員・中学生</p> <p>法人職員・小3生 施設長</p>	<p>地域との交流</p>  <p>地域との交流 災害発生時の各団体及び 地域住民の連携の確認</p> 	<p>9/18 実施 9/28 実施</p>	<p>毎年の恒例行事 福祉避難所としての役割の確認</p>

10月	夏祭り評価会 大竹高校地域交流会 	施設長・事務長 相談支援員・社協 法人職員・高1生	ゆうあい夏祭りの評価及び 今後の共同事業の確認 地域との交流	10/11 実施 10/29 実施	来年の修正点の確認 夏祭り以外の活動の準備 毎年の恒例行事
	大竹市ふれあい健康・福祉まつり	施設長・事務長 相談支援員 社協・大竹市 地域住民	地域との交流	10/27 実施	入居者作品の展示 障がい利用者のステージ発表 民生委員等との共同作業による 交流
11月	大竹市社協フォーラム参加	施設長・事務長 相談支援員 社協・地域住民	ゆうあい祭りの事例発表	11/22 実施	地域交流への考え方を説明 今後は地域に受け入れられる企 画の提示が必要
2月	大竹高校介護士志望者実習	法人職員・高3生	地域との交流	2/6・7・10 実施	進学予定の学生に法人PR
3月	ケアマネ協シンポジウム参加	施設長他法人職員	災害時の他職種連携	3/26 実施予定	

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

- 既存の他団体との関係や施設の知名度・信用度を活かし、さらなる信頼関係を築くために、近隣地域との交流を促進すべきである。
- 地域の方々との顔の見える関係の構築の必要性を痛感した。
- 自施設職員へのアンケート実施等を行うことにより、法人全体の取り組みに拡げていく重要性を感じた。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地元自治会への入会	話合い中	組織の入会に違和感を持つ住民の方がいる。入会が目的でないことを説明。入会前に自治会行事に参加していく。
2	ゆうあいふれあい夏祭りへの参加者の拡大	参加者数は増加	近隣住民の参加が少ない。普段からの交流を深める必要がある。
3	災害時の具体的な計画の作成	自施設内での計画は作成済み。	他施設や他団体、地域住民との具体的な計画作成・訓練が必要。連携を深める方策を検討する必要がある。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2020年度の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ○自治会との連携づくり ○現在の地域との繋がり継続・強化 ○「ゆうあいふれあい夏祭り」の参加者拡大
中長期的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ○地元の幼稚園・小学校・中学校・高校との連携を継続・強化し続け、世代を超えて人が集まる施設を目指す ○災害時に協力し合える関係団体との連携強化 ○近隣住民が気軽に立ち寄り、「長屋」のような施設となる

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	他の施設でも様々なご苦労があることが解った。自施設だけで立案・実施だけでは限界を感じることもあるため、他の施設との連携やアイデアの共有などの協力が必要だと感じた。
施設長	地域の中で、施設を単なる施設としてのみ存在させるのではなく、様々な団体や個人の方々と共に「できること」を行ない、当法人も地域に出て行き、様々な年齢の方々とつながりを持っていきたい。地域の子も達が、「ゆうあいの〇〇おばあちゃんに聞いてこよう」というような繋がりができればそれこそが、「地域共生」、「地域ケア」ではないだろうか。

施設と地域との繋がりを作り、継続していくために

〔福山ブロック〕 サンフェニックス

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば「共生社会」を念頭においた課題)

1. 地域の高齢化が進む中で、高齢者の外出頻度が下がっている。地域包括、地域の福祉施設協同で、地域への具体的な支援策をさぐる。
2. 災害が起こっていない地域、起こる可能性が低いと思われる地域は、防災に対する意識が低いことが問題。住民、施設協同で地域への定期的な防災訓練を実施することが必要。
災害時は混乱が多くあることから、施設が対応できること、そうでないことを明確にすることが課題。
3. 施設を身近な存在だと認識してもらうには、地域へ出向いていくことが課題。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような「共生社会」を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

施設が身近な存在になり、相談事、地域への支援ができ、開かれた施設であること。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像

1	地域包括、地域の福祉関係施設や病院等、地域への支援づくり。
2	施設と住民との協同防災訓練を通し、防災の意識づけを図る。
3	施設職員と地域住民との触れ合いと地域貢献活動。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標

1	地域包括、近隣の事業所が協力し合い、町内に認知症カフェを開催し継続していく。
2	年に1回の協働防災訓練を継続的に実施していく。
3	それぞれの職員が地域へ出やすいように、町内の清掃活動から参加し交流を深める。



5. そのための事業内容

- ① 地域包括、地域事業所の協力で、認知症カフェの開催する
- ② 地域住民との防災訓練実施
- ③ 地域清掃の参加

6. プロジェクト推進体制

主なメンバー、ケアハウス相談員、GH管理者がボランティア調整を行う。例えば、地域清掃では、事前告知し参加人数を確保する。

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
10月	10月以降定期的に認知症カフェ開催予定  	地域包括 町内の各事業所 施設系、通所系 福祉用具業者	町内は独居宅や高齢夫婦宅が多く、外出頻度が少ない。住民より、外出する機会、理由が無いためだという問題がある。 そのため、町内に認知症カフェを協同で新しく開催し、外出するきっかけ作りを増やしていく。	・7月、8月実行委員会開催 参加者…自治会、地域包括地域の15事業所 (医療、福祉関係) 認知症カフェ内容決定 ・10月より、毎月1回認知症カフェ実施。	・9つの事業所で、毎月持ち回りで、内容等を決めていく。 ・各事業所の利用者も参加したい声もあるが、住民の参加人数も多い。 ・事前に、次回参加人数を把握する。
7月 9月 11月	運営推進会議内で、防災訓練計画 昨年度の防災訓練の問題点、住民からの要望があった訓練を精査し、施設として訓練内容を提出 施設、住民協同の防災訓練	地域住民 施設関係者 <u>運営推進会議のみ</u> <u>市職員、包括、乳児院が参加</u>	土砂崩れ、地震災害、水害発生時、住民自身の災害の意識向上を図るために防災訓練を行っていく。 その中で、福祉拠点がある小立団地内で住民、施設が協同で防災訓練を実施し、柔軟に対応できること、問題点があることを吸い上げていく。	11月に協同防災訓練実施 団地住民の災害発生時の行動確認。 保存食の試食会。 <u>玄米がゆ・玄米がゆ(梅)</u> <u>おかず(2品)</u> <u>パン(オレンジ、黒豆)</u> <u>保存用の水</u> 段ボールベッドを住民主体で考えてもらい作成。	災害発生時での行動確認では、乳児院(職員3名、乳児4名)も参加。今回初めて参加され、仮に避難した場合の経過時間の確認を測られた。 団地住民28名参加。 保存食会では、昨年の炊き出しと違い、冷たい物を食べることへの戸惑い、味が薄い、濃い、食感の問題等、初めての経験となった方が多数。 ベッド作成では、4グループに

	住民、施設職員、学生	<p>地域清掃には、さまざまな方が参加されるため、触れ合うことで地域の実情等を把握していく。</p> <p>地域の貢献活動として、さまざまな職員も参加しやすい。</p>		<p>分かれ、おむつ等のダンボールを使用し作成。試行錯誤繰り返し、早い時間では20分、遅くても40分程度で作成。</p> <p>施設が用意した段ボールは微妙に高さ、大きさは異なっても、強度も良く、市販されている段ボールベッドを考えると、比較的作成しやすい面があった。</p> <p>課題として、災害時の受け入れ体制が、厳密に整っていない状態。</p>
団地内清掃、町内清掃	地域住民	<p>外でラジオ体操が出来る場所が減り、音が出て問題の無い場所提供。</p>		<p>当初は、さまざまな職員が参加する予定であったが、主に各部署の責任が参加することが多かった。</p>
	<p>夏休み期間 ラジオ体操が出来る場所提供</p>	<p>6月町内清掃参加 10月団地清掃参加 12月町内清掃へ参加予定 12月団地内での防災研修会へ参加予定</p>		

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

他の施設では施設の防災訓練のなかで、災害があったことを想定し保存食を食事で提供する機会があることを知り、当施設でも施設内防災訓練の内容に組み込む良いアイデアと考える。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地域包括、近隣の事業所が協力し合い、町内に認知症カフェを開催し継続していく。	包括、各事業所との協力で、毎回違った内容で認知症予防に取り組んでいる。	開催ごとに参加に男女の偏りが出ており、内容を吟味していく必要あり。 また、内容が詰まってくることから、各事業所間で考えを出し合う機会を作る必要がある。
2	年に1回の協働防災訓練を継続的に実施していく。	段ボールベッド作成を実施し、施設周辺は大きな災害を経験していない地域である為、地域住民の防災意識の向上に繋げることができた。	町内が行う防災訓練と差別化を図り、運営推進会議や地域の要望を吸い上げ施設と住民だから必要な防災に取り組んでいく。
3	それぞれの職員が地域へ出やすいように、町内の清掃活動から参加し交流を深める。	各クリーン活動に4回参加させていただき、毎回5名～8名の職員が参加した。 交流を図ることで、サンフェニックスを知っていただく良い機会になった。	毎回、参加者が同じ傾向だったため、来年度からは出来るだけ参加者が重ならないように勤務調整での工夫を行う。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2020年度の取り組み	施設所在の団地内では、毎年交代する自治会長と良好な関係を築き、交流の継続に努めていく。 施設全体として、地域貢献できる体制を作っていく。 住民の意見を取り入れながら、公演会、研修会を行っていく。
中長期的取り組み	地域との関係性を密にし、施設が持つ専門性を出し支援していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	地域貢献活動を始めて2年目が終わるが、いまだ活動内容が定まらないことが問題としている。 今は、地域の要望を聞き入れ、施設として出来ることを考え対応していく。
施設長	地域への取り組みが、社会福祉法人側からの押し付けがならぬよう、地域ニーズを把握しながら馴染みの関係構築が大事である。 継続性を持ち、プロセスを大事にしながらか対応していく必要があり、プロジェクトありきにならぬよう注意が必要と考える。

世羅町西部地域と行政・事業所間の連携体制の構築

〔尾道ブロック〕 特別養護老人ホーム せせらぎ園

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば「共生社会」を念頭においた課題)

昨年度の活動を通し、自治センター、行政とのつながりができた。平成30年の豪雨災害を中心とした内容での協議を行い、今年度に入り地域全体での避難訓練の実施につながった。豪雨災害から世羅西地域全体の問題点の把握を行ってきたが、よりこまやかなニーズの把握、問題点の掘り起こしの為、地域ごとの関りを増やさなくてはならない。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような「共生社会」を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域の方に困りごとが起こった時に、隣近所や地域住民自らが解決に向けた協力者の一員となっている。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の”見たい未来“を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	自治センターごとの関りを行うことで、地域課題の把握ができる
2	地域住民と法人のネットワークづくり
3	地域住民自らが課題の発掘や情報発信できる

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	地域に5か所ある自治センターと個別の関りを行う
2	自治センターの活動支援(サロン運営、見守り支援など)を行う
3	施設を知っていただき、来ていただくための取り組みを継続して行う、情報発信を行う





5. そのための事業内容


- ・地域連携懇談会の継続開催(地域、行政、他法人との情報交換など)
- ・自治センターごとの個別訪問
- ・自治センターの活動支援
- ・現在行っている事業への参加呼びかけ(ふれあい喫茶、オレンジカフェ)
- ・地域行事への継続参加

6. プロジェクト推進体制

- ・施設内地域交流委員会（施設長、生活相談員、老人介護支援センター職員、居宅介護支援事業所管理者、主任訪問介護員、デイサービス管理者）
- ・地域代表（世羅町西部地域の自治センター5か所、民生児童委員）
- ・行政（世羅町福祉課、企画課、総務課、生活支援コーディネーター）
- ・高齢者専門職（自法人以外の医療、福祉、介護、障害分野の事業所）

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
4月	4月21日 地域連携懇談会 	世羅町西部地域自治センター 行政 施設内地域交流委員会	避難訓練の開催にむけた調整	避難訓練の内容、当日の流れの 確認	
5月	5月26日 世羅町西部地域災害発生前避難 訓練 	世羅町西部地域自治センター 行政 施設内地域交流委員会	大規模災害の発生が想定される 状況での事前避難を行い、実際 の行動のなかで問題や課題の発 掘	避難訓練の実施、訓練後の意見 交換、反省会 	実際の災害発生を想定して訓練 を行ったが、参加者ごとのアド リブが入る場面もあり緊張感の ある訓練となった。実際に災害 が発生した時に同じ行動ができ るか、定期的な訓練の実施も検 討が必要である。
7月	7月13日 せらにشتاونセンター環境整備	地域住民 世羅町西部地域自治センター 行政 施設内地域交流委員会	7月末開催の長寿つばきの里祭 り開催に向け、会場となる、せ らにشتاونセンター周辺の環 境整備	会場周辺の草刈りおよび環境整備 	各団体との交流、接点を持つこ とで祭りの開催をスムーズにす る。
	7月27日 長寿つばきの里祭り	地域住民 世羅町西部地域自治センター 行政	会場の準備設営、施設入所者、 事業所利用者の作品展示 施設入所者の外出	施設入所者の外出および地域の 方との交流	施設入所者の方が外出すること で、普段面会に来られない地域 の方と交流、再会する機会と

3月	3月20日(予定) 企業対抗ファン駅伝世羅大会 全国世羅キッズ駅伝大会 ※感染症拡大防止の為、開催中止	施設内地域交流委員会 地域住民 主催団体 (せらにし青少年旅行村) 行政 施設内地域交流委員会	会場の準備設営 当日スタッフ、選手としての参加		なった。
毎月	毎月第二・四木曜日 ふれあい喫茶、オレンジカフェ 毎月第三木曜日 サービス担当者会議	地域住民 施設入所者 家族 障害分野の事業所 施設内地域交流委員会 町内各事業所	施設の開放 地域住民との交流 事業所間の交流 情報交換	せせらぎ園の喫茶コーナーを会場とすることで、施設入所者(特養、ケアハウス)入所者家族、地域住民の交流を図る。 せせらぎ園を会場とし、町内事業所担当職員が集まることで情報交換や職員間の交流を図る。	施設を会場として開放することで普段施設に来られない方を招き、閉じこもり防止や地域交流の場となっている。 

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

地域性や施設の立地条件により、地域との関り方も様々であると感じた。

当施設と同じように防災訓練・避難訓練を行われた施設も多く、訓練の内容や既存の会議などを活用した広報の仕方など参考となった。

また、中心となるチームが動くだけでなく、職員からの理解を得られ、職員も施設の一員として地域貢献活動への参加ができるような、施設内での広報についても検討していきたい。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地域に5か所ある自治センターと個別の関りを行う	人材不足や利用者確保の取り組みのため業務多忙となり、地域に出向くことが困難な状況となり自治センターごとの関りが持てなかった。	今年度は他部署担当職員との連携がうまくいかず組織的に動けなかった。 次年度は、他部署と連携し分担して取り組む。
2	自治センターの活動支援（サロン運営、見守り支援など）を行う	自治センターごとの個別の関りではないが、毎年参加している地域行事へ参加することで地域交流を図った。	地域行事への継続参加
3	施設を知っていただき、来ていただくための取り組みを継続して行う、情報発信を行う	ふれあい喫茶、オレンジカフェ、サービス担当者会議などせせらぎ園を会場として開放することで普段施設に来られない方に来ていただく機会とした。	地域交流、事業所間交流の継続

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2020年度の取り組み	今年度は人材不足により地域に出向くことが困難ななかで、これまで継続している地域行事への参加をおこなってきた。 次年度は第二回の避難訓練の実施や、今年度取り組めなかった自治センターへの個別訪問を、まず一か所から行い、継続した地域との関わりがもてるよう取りくんでいきたい。
中長期的取り組み	地域との関りが継続したものとなり、地域住民と法人のネットワークを構築し、地域住民自らが課題の発掘や情報発信の担い手となるよう取り組んでいく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	前年度より計画していた避難訓練が実現し、一区切りついた中で今年度の取り組みを考えたとき、人材確保や日常業務との両立により取り組みが困難なこともありました。地域行事への参加など以前からの地域との関わりが途切れないよう、小さなことでも前向きに取り組んでいきたいと思います。
施設長	今後ますます少子高齢化による人材不足や利用者減少が進み、地域との繋がりが必要となります。社会福祉法人として、日頃から顔の見える関係づくりをおこない、新たな地域ニーズの掘り起こしと課題解決に繋げる基盤づくりができました。

地域活動についての取り組みを通じて

【東広島市ブロック】 桜が丘保養園

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば「共生社会」を念頭においた課題)

老人福祉施設として、関係が希薄になりつつある住民同士が、世代や背景を超えてつながり、相互に役割を持ちながら支え合うことができる地域を育むために、地域の住民と一緒に課題解決に取り組む必要がある。

これにより、地域に暮らす住民一人ひとりが、生活における楽しみや生きがいを見出し、閉じこもりや介護等の様々な困難を抱えた場合でも、社会から孤立せず、安心してその人らしい生活を送ることができる社会の実現を目指す必要がある。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような「共生社会」を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域丸ごとのつながりの強化し、自助、互助、共助が自発的に行える地域共生社会を目指す。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像

1	地域リーダーを中心として、誰もが役割を持ち、お互いが配慮し合える関係の実現。
2	人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることができる社会の実現。
3	誰もが孤立せず、その人らしい生活を送ることができるような地域の実現。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標

1	計画や活動等に参画できるリーダーを、地域に赴いて育成する。
2	市の職員や地域の事業所等と連携を図り、定期的に交流することで信頼関係を構築する。
3	地域での活動等を通して、顔の見える関係性作りを目指す。

5. そのための事業内容

- 百歳体操(毎週施設を開放し実施)
- 在宅高齢者見守り協力員研修(地域包括ケア)
- 家族介護教室(毎年4回開催)
- オレンジ交流会(カーブ観戦でのパブリックビューイング)
- ふれあいサロン(研修等)

6. プロジェクト推進体制

東広島西条北地域相談センターが主体になり、市の介護保険課、地域包括支援センター、地区社協などの各団体と連携をとりながら、居宅介護支援事業所の介護支援専門員及び特別養護老人ホームの介護支援専門員、社会福祉士、管理栄養士、歯科衛生士等が多職種で協力しながら地域に出向く体制を構築し、地域での活動等を通して信頼関係の構築を図るために尽力している。

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
4月 ～ 3月	▼百歳体操 身体機能や生活機能の維持・向上を目的とした体操の実施。(金曜日/週)	高齢者相談センター 地域住民	<ul style="list-style-type: none"> 身体機能や生活機能の維持・向上を目指す。 顔の見える関係性作りを目指す。 地域リーダーの育成を目指す。 	地域交流スペースとして、事業所内の施設及び設備を無償提供する。	定期的な外出機会の確保に繋がり、近隣住民の交流の場となっている。
6月	▼在宅高齢者見守り協力員研修 地域の在宅高齢者見守り協力員を対象とした研修会の実施。 (06/06・06/07・06/10・06/11)	高齢者相談センター 地域包括支援センター 東広島市社会福祉協議会 民生委員 見守り協力員	<ul style="list-style-type: none"> 計画や活動等に参画できるリーダーを、地域に赴いて育成する。 地域での活動等を通して、顔の見える関係性作りを目指す。 	地域の在宅高齢者見守り協力員を対象とし、医療保険及び介護保険の諸制度や自治体の取り組みを紹介。	在宅高齢者見守り協力員の業務の中で、制度や自治体の取り組みについて、紹介及び説明することができた。



<p>7月 9月 10月 11月</p>	<p>▼家族介護者教室 保健福祉分野に関する、制度及び活用方法の周知徹底を目的とした研修の実施。</p> <p>① 07.12 「災害時プライベートに配慮した排泄」 ② 09.18 「みんなで知ろう最新の福祉用具」 ③ 10.04 「自立した生活を維持するために」 ④ 11.06 「在宅での生活に必要な予備知識」</p>	<p>高齢者相談センター 地域のサービス事業所 地域住民</p>		<p>①災害時に役立つ、排泄に関する商品や介助方法について伝達。 ②生活を支える便利な福祉用具の使い方や、最新の福祉用具についての情報を伝達。 ③身体のケア及び口腔のケアを含めた、健康に役立つ情報を伝達。 ④介護保険サービスや、インフォーマルなサービスについて伝達。</p>	<p>4ヶ所の地域で実施した。それぞれの地域において、目標は達成したと言えるが、アンケート結果等を勘案すると、良好な関係作り及びリーダーの育成に関しては、今後も取り組みの継続が望ましい。</p> 
<p>6月 9月</p>	<p>▼オレンジ交流会（カーブ観戦でのパブリックビューイング） 「支え手」「受け手」という関係を超えて、人と人をつなげることを目的とした活動の実施。 (06/09・09/30)</p>	<p>高齢者相談センター 地域包括支援センター 東広島市社会福祉協議会 地域のサービス事業所 地域住民</p>	<p>顔の見える関係性作り</p> 	<p>「支え手」「受け手」という関係を超えて、人と人をつなげることを目的とした交流会を開催し、双方の制度や立場を情報として交換する。</p>	<p>相手の立場に立った考え方を、お互いが徐々に身につけることができるように、今後も取り組みを継続し、更なる相互理解を推進することが望ましい。</p>
<p>5月 10月</p>	<p>▼ふれあいサロン 各地域ふれあいサロンでの共同企画 (05/23・07/02・07/10・07/19・07/25・09/03・09/25・10/17)</p>	<p>高齢者相談センター 地域住民</p>	<p>地域リーダーの育成</p> 	<p>情報伝達や研修等を活用し、自分達の役割やできることを、自ら見つける為の活動を実施。</p>	<p>高齢化等の影響もあり、リーダーの育成に関しては、今後も取り組みの継続が望ましい。</p>

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

計画や活動等に参画できるリーダーの育成を地域に赴いて実施しているが、活動等に参加できる年齢層が高く長期的な育成が困難な状況である。東広島市社会福祉協議会でも同様の課題を解決するために、様々な取り組みを実施している。今後は、プロジェクト会議で得たヒント等を参考にし、東広島市社会福祉協議会と連携及び協力しながら地域リーダーの育成に尽力しようと思う。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	計画や活動等に参画できるリーダーを、地域に赴いて育成する。	・地域の中核組織として地域に根ざした活動がおこなわれた	地域の中での温度差を解消するために、地域に根ざした活動を継続する必要がある。
2	市の職員や地域の事業所等と連携を図り、定期的に交流することで信頼関係を構築する。	・地域からサロンに招待され勉強会を実施出来る様になった	勉強会を実施できる範囲を徐々に拡大する為に、信頼関係の構築に向けて、定期的な交流を継続する必要がある。
3	地域での活動等を通して、顔の見える関係性作りを目指す。	・地域住民が気軽に来やすい場所となりつつある	現在より広範囲の地域住民が、気軽に来ることが出来る場所になるよう、取り組みを継続する必要がある。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2020年度の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・地域リーダー育成のために市の職員、包括職員、社会福祉協議会と連携を取りながら、西条北地域の課題を話し合う機会を定期的に行い、深く関わる。 ・今後も顔の見える関係性作りを通して頼り頼られる組織となる。
中長期的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のサロン等の社会資源の中核組織として連携を行った事で、地域全体が活性化し、自助、互助、共助が自発的に行える地域となっている。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	<p>毎月の地域活動における連携を図ってきた為、信頼される関係性が築かれてきました。今後も地域の方と交流を図り地域活動を共に行う事で社会福祉法人としてなくてはならない法人を目指していきます。</p>
施設長	<p>少子高齢化に歯止めがかからない状況で、高齢者福祉施設の地域の拠点として果たす役割は益々重要になってくる。専門性の高い職員を、地域共生社会に送り出すことが、地域共生社会実現に向けた、施設の大事な役割と思います。</p>

地域福祉拠点設立推進プロジェクトに参加して ～プロジェクトのふりかえりと今後の展望～

1 プロジェクトについて

本プロジェクトは、広島県老人福祉施設連盟として、各施設がそれぞれの地域において、地域共生社会実現に向けた取り組みがより効果的・効率的に進むよう「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」としてはじまりました。

プロジェクトとしての初年度の2017年度には、本連盟自主事業として各ブロックからの代表施設職員が参加し、広島県や広島県社会福祉協議会、広島県地域包括・在宅介護支援センターの協力をいただき、連盟施設等が各地域で地域福祉の拠点となるための“取り組み方”を「地域福祉拠点設立のための手引き」としてまとめました。

2018年度は広島県からの委託を受けて、地域共生社会実現のための1つの事業として「地域福祉拠点設立のための手引き」に基づく実践編となるべく、各ブロックの代表施設がそれぞれの施設で取り組み、プロジェクトが後押しする形ですすめました。プロジェクトによる取り組みは「事例集」として、国内の先駆的な取り組みもあわせて掲載し、各施設がより効果的・効率的に進めていくための参考となるようにまとめました。

プロジェクト3年目となる今年度は、前年度プロジェクト参加施設の取り組みがさらに高まると共に、新たなプロジェクト参加施設の地域共生社会の実現に向けた取り組みがすすむことを目標におき、プロジェクトメンバーが各取り組みから相互に学び・気づき・ヒントを得て協働で成果が得られるようすすめました。本年度はその取り組みを「継続参加施設」と「新たな参加施設」として本事例集にまとめております。

2 プロジェクトを通して感じたこと

私は、本プロジェクトに3年間参加させていただき、プロジェクト委員の変化も感じました。

例えば、施設の相談員としてご利用者やご家族に向き合ってきたプロジェクト委員が、プロジェクトをとおして地域とかわるきっかけを持ち、地域住民とのかかわりの中で、これまでに経験したことがない課題に直面し、課題解決に向けてさまざまな工夫に取り組みました。これらの経験がその委員の視点を広げ、自信につながり、相談員としての仕事にも良い影響を与えているのではないかと感じました。他にも、これまで地域とのかかわりを当たり前のように取り組んできた委員が、今回改めてその取り組みを振り返る機会となり、施設の理念に基づく社会福祉法人としての重要な取り組みであることを再認識し、地域のニーズを丁寧にくみ取りすすめていくことの重要性を学んだように感じました。

本プロジェクトは、各委員の施設での取り組みが推進することと同時に、職員の気づきや成長にもつながる機会になったのではないのでしょうか。

3 プロジェクトから学んだ重要な視点

本プロジェクトを通して、特に重要だと感じたことをあげさせていただきます。

(1) 既存のつながりを活かす

施設には、さまざまな人や地域住民と交わる機会があります。地域との関係づくりでは、きっかけづくりが難しいですが、今ある関係性から地域の具体的な声に耳を傾けることは、比較的取り組みやすいように感じました。例えば、「地域に助けてあげたい人がいるけど、どのようにかかわってよいかわからない」「この前のような豪雨災害があったときは誰に相談したらよいかわからない」など、地域にはさまざまな心配や困りごとが顕在・潜在しています。

地域の課題はつながりから知ることも多いのではないのでしょうか。運営推進会議、町内清掃、自治会の会合などもそのような機会になったようです。

(2) チームで地域とかかわる

特定の職員が、現状の日常業務に加えて施設を代表して地域とかかわるのは無理があります。たとえ、その職員が仲間を誘って協力してくれる状況ができたとしても、それが施設の方針に基づく業務と認められ配慮されなければ継続困難になります。

地域との関係づくりの前に、その取り組みが施設の方針として示されると共に、その方針を具現化する体制があることが重要ではないでしょうか。

(3) やりっぱなしにしない

地域の福祉拠点となりうるためには『継続性』が重要だと思います。地域の福祉ニーズは日々変化していきます。取り組みを共にふりかえり、継続したつながりの中で、顕在・潜在する地域ニーズに気づき関わり続けることが、地域における信頼を得ることにつながるのではないのでしょうか。

4 おわりに

私たちは老人福祉施設です。福祉を必要とする高齢者やその高齢者を取り巻く地域住民の福祉ニーズにこたえていく使命があります。近年、これまでの社会福祉事業や制度だけでは支援することが難しい「制度の狭間の課題」や「複合的課題」が増加しています。これらの”新たな福祉課題”にも気づき対応していくことが、社会福祉施設としての存在意義にもつながっていくのではないのでしょうか。

これまでの取り組みや本事例集が、広島県老人福祉施設連盟の会員施設・事業所が、それぞれの地域を支える地域福祉拠点としての活動を推進するための一助になれば幸いです。

最後になりましたが、お忙しい中、プロジェクトに理解と参加をいただいた各施設の施設長様、委員の皆様にも心より感謝申し上げます。

◆今後の展望◆

3年間、会員施設の取り組みをプロジェクトで推進してきましたが、本連盟にとってどのような成果があり、社会福祉法人としての使命を果たすことにつながったのか、明確な評価はできていません。今後は、プロジェクトによる取り組みを「広島県老人福祉施設連盟研究発表会」で発信し、会員等による講評を得て、取り組みを具体的に知っていただき、各施設でさらに参考にしていただけるようなプロジェクトが推進できればと考えております。今後とも会員施設の積極的な参加と協力をお願いいたします。

2020年3月
地域福祉拠点設立推進プロジェクト
委員長 小野 誠之

広島県老人福祉施設連盟

令和元年度地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議 委員名簿

	所属ブロック等	事業所名	職 名	氏 名	備 考
役員等	廿日市・可部	特別養護老人ホーム ゆりかご荘	施設長	池田 円	会長
	尾 道	特別養護老人ホーム 楽生苑	施設長	山中 康平	担当副会長
	東広島	特別養護老人ホーム 瀬戸内園	施設長	中川 勝喜	担当理事
	廿日市・可部	特別養護老人ホーム 阿品清鈴	施設長	小野 誠之	委員長
担当施設	福 山	ケアハウス サンフェニックス	生活相談員	日下部 浩司	継続
	尾 道	特別養護老人ホーム せせらぎ園	主任生活相談員	谷満 浩行	継続
	三 次	特別養護老人ホーム すいれん	施設長	滝本 雄司	
	東 広 島	特別養護老人ホーム 桜が丘保養園	介護係長	角本 伸志	継続
	呉・海田	特別養護老人ホーム 誠心園	生活相談員	山下 智春	
	廿日市・可部	特別養護老人ホーム ゆうあいホーム	事務長	伊藤 調	